

# マチスに見入る

会員

林 田 理栄子

断捨離中の本の山から古いマチスの画集が出て来た。マチスは、かっこいいのだ。スマートだしクール、いつ見ても新しい。

不思議な絵を見つけた。1910年「音楽」赤い裸の人物が5人、草原の上で2人は楽器を奏で、3人はぼんやりと口をあけて歌を唄う。何だこれ、だがたしかに音楽が聞こえてくる。

時間は張りついた様に動かない。たった3色で描かれた絵は奇妙なステキさだ。彼の代表作シリーズ「ダンス」1906年、1910年の作品も強烈だ。5人の赤い裸婦が手を取り輪になって草の上で踊る。その静かでダイナミックな舞踊。

音楽も舞踏も人間が言語を持つず〜っと前から詩の下に生まれ生じていた。そして絵画という作業はそれを書き留める作業でいいのかなんて考えた。ぼんやりと。「フランス窓」という1914年の作品もとても妙な気がした。夜外に向って窓が開いているだけの絵だ。外はただ闇しかない。ところがこの黒い闇は、なぜか温かく心地良い感じがするのだ。この闇はひょっとしてこの世じゃないのかもしれない。などとまたぼんやり妄想していたらアレッと気がついた。このマチスさん100年前のスペイン風邪の最中に描いていたのだ。ヨーロッパだけでも100万人も死んで戦争さえこの続きは後でとか言ってやめてしまった。今起っているのは百年ぶりの疫病だ。死が近いと、のぞけるのかな。とりあえず地球を暑くしてごめんなさい。本日の気温は29℃、北海道でミカンが生る日もくるか？

マチスの画集は取っておく。